

今回は「心の相談室」の活動の一つ、移動傾聴喫茶「カフェ・デ・モンク」(Café de Monk) の取組みについて書きたい。この活動はテレビや新聞でも度々取りあげられており、御存じの方も多だろう。発端は、カフェのマスター「ガンディ・金田」こと金田諦應氏（宮城県栗原市、曹洞宗通大寺住職）が、オーストラリアの仏教者による義援金をもとにはじめたもので、2011年5月15日に南三陸町で最初の傾聴カフェが開催されている。金田氏によれば、理事として参加している「心の相談室」の活動を模索する中で、自身が行っている「カフェ・デ・モンク」の話をしたところ賛同を得て同室と「緩やかに連帯」するようになったという。「心の相談室」のホームページによると、これまで宮城県を中心に、避難所や仮設住宅などにおいて130回以上不定期に開催されている。さらに、各界からの協力の申し出を受けて、2011年10月からエフエム仙台をキー局としてラジオ版「カフェ・デ・モンク」の放送も行われた（2014年3月29日に終了）。ここでは、いわゆる実働部隊の「カフェ・デ・モンク」のほうを取り上げる。

### ホッとできる異次元な空間を

震災から間もないころうどんの炊き出しに行った避難所で、金田氏は「国境なき医師団」が引き上げるのを必死に止める責任者の姿を見た。命を医者に託しているその様をみて、「ならば私たち宗教者は何をすればいいのだろう」と考えたという（『宗教と現代がわかる本2013』34頁）。そうして考案されたのが「カフェ・デ・モンク」である。その目的について金田氏は、「被災地におもむいて傾聴といいますか、いろいろなお話を伺いながら少しでも心に寄り添って元気になっていただきたいという目的で「カフェ・デ・モンク」を開店した」と語っている（『ラジオ「カフェ・デ・モンク」』11頁）。始動したころ被害の大きかった地域の避難所は瓦礫に囲まれ、殺伐としたところが多かった。食べ物も支援物資として支給されたものしかなかった。そんな中、金田氏は「ちょっとホッとできるような異次元な空間を作りたかった」という。そのために用意されたのが、何種類もの飲み物とケーキである。それについて次のように語っている。

支援物資は、与えられるもので、選べないじゃないですか。ですから出来るだけ、みなさんに選んでいただけるように十種類くらいの飲み物、コーヒー、紅茶、お抹茶、コーラ、クリームソーダなどを持って行きました。…それを見た途端に疲れも取れるし、別な空間に入っていけるのがケーキだと思うんですね。ですからケーキにはこだわりました。五種類から十種類くらい持っていきました。とにかく選んでください。（前掲書、13～15頁）

キーワードは“選ぶ”ということだろう。震災直後の状況では幾つもの食べ物、飲み物を前に自分で選ぶことなど出来なかった。淹れたてのコーヒーやスイーツなど言わずもがなである。そもそも、それらは一息つくときや何か特別なときに食べることが多い。そうした“食糧”というよりは“おいしい物”を、しかも何種類も無料で提供することによって、避難先の張りつめた生活に、ホッとできる場を作ろうとした。それは効果があったようで、「みなさんば一つと入ってきて、そのケーキを見てニコッと笑った瞬間が最高でした」と金田氏は述懐している。そしてカフェに集まった人々は、ホッとしたところで30分や1時間お茶をしながら、大変だったことを話してい

たという。

### 布教ではなく被災者の支援のため

この移動喫茶のコンセプトはいつもカフェの中心に置かれるというメッセージボードに示されている。

“Café de Monk”はお坊さんが運営する喫茶店です。／ Monkは英語でお坊さんのこと。／もとの平穏な日常に戻るには長い時間がかかると思います。／「文句」の一つも言いながら、ちょっと一息つきませんか？／お坊さんもあなたの「文句」を聴きながら、一緒に「悶苦」します。

このように、「モンク」を使った掛け言葉が掲げられ、さらにBOSE（ボーズ）のスピーカーでセロニアス・モンクのジャズが流れるという洒落をきかせて、「お坊さんの運営する喫茶店」といっても堅苦しいものにならないように、また、運営に関わる宗教者自身も強張った顔ではなく、適度にくだけた雰囲気迎えられようと考えられている。説教や法話なども一切行われぬ。「一緒に『悶苦』します」とあるように、何か特定の立場から教えを説くのではなく、あくまでも被災者の方々の文句や悩みを聴き、少しでも元気なってもらいたいとの願いが込められている。金田氏もただ手を握って帰ってくるといふようなこともしょっちゅうだという。

カフェ・デ・モンクに度々参加されている森田敬史氏は、年配の女性が「あまり家族の前では、こういう話はできないんです」といってお話をされたエピソードを紹介している。家族や親戚が被害に遭った中で、それぞれの家族に配慮して言葉を慎まなければならないことがあるとのことで、「そういう方でもここなら話をしても良いかなあと思って頂けるような場」になっているという（森田敬史「望まれる宗教者の姿」、『東北ヘルプニュースレター』第3号、2013年、6頁）。医師で「心の相談室」室長の岡部健氏は「お坊さんがたと一緒に喫茶店を開いてますとね。被災者は頭丸めている人のほうにしか行かないんですよ」と語っている（『ラジオ「カフェ・デ・モンク」』31頁）。また、仏壇を拝んでもらいたいという要望もしばしばあるそうである。もちろん、カフェで何度か顔を合わせる中でより深い話ができるようになるということもあるのだろうが、宗教者だから話せたり、頼めたりする面もあるのかもしれない。そうして話を聴き、ときにはご先祖や震災で犠牲になった方に祈りを捧げることで、被災者あるいは遺族に対するケアが図られている。

もともと、仏教者を中心に運営されているため、カフェで会話を動かすために用いられる小道具も、掌サイズのお地藏さんや数珠風ブレスレットだったりする。しかし、仏教者だけでなく、キリスト教や神道などに属する宗教者も協力しているほか、次回に紹介する臨床宗教師養成講座の研修の場にもなっており、様々な宗教・宗派に属する多数の宗教者がこれまで関わってきた。その活動は特定の宗派と結びつかないよう、布教にならないよう慎重に行われている。ときには、「イスラームの聖職者が仮設のおばあちゃんと一緒にお地藏さんを作る。うれしそうに微笑むおばあちゃん」ということもあるそうである。各宗教者の被災地支援のモチベーションは特定の信仰から来ることもあるだろうが、「カフェ・デ・モンク」は布教のためではなく、被災者に元気になってもらいたいとの思いで活動されている。それが、宗教・宗派あるいは非宗教の立場を超えて協働できる理由なのだろう。